

大槻文彦訳述「言語篇」という近代

長沼 美香子

要旨

This paper explores how modernization was performed through the act of translation in Meiji Japan, roughly the late 19th century, by focusing on the text ‘Language’ in *Chambers’s Information for the People* and its Japanese version, which was translated by Otsuki Fumihiko. Otsuki is quite well-known for his *Genkai*, the first modern Japanese dictionary. Otsuki’s translation of ‘Language’ reveals his struggle to introduce the basic concept of *gengo* as language in Western philology, which was based on the theory of a universal grammar and a comparative historical approach. In line with descriptive translation studies, the author will problematize the translation of ‘Language’ in the context of linguistic studies at the time of Japan’s modernization.

キーワード：大槻文彦，翻訳，「言語篇」，『百科全書』，『言海』

1. はじめに

維新直後の文明開化の時代、明治新政府内に設立されたばかりの文部省は『百科全書』という大規模な翻訳プロジェクトを企画した。その一冊として刊行された「言語篇」は、大槻文彦が翻訳を担当している。大槻文彦訳述「言語篇」については、時枝誠記『国語学史』（岩波書店、1940）に、「明治19年大槻文彦博士は、チェンバース⁽⁷⁷⁾の百科辞書中の言語篇を翻訳された。これは西洋言語学の我が国に紹介された嚆矢であつたらう」（p. 167）との言及がある。しかしながら、これまでの国語学・日本語学や言語学の研究史において、「言語篇」が取り上げられることはほとんどなかった¹。

大槻文彦（1847-1928）は、わが国初の「近代国語辞書」とされる『日本辞書 言海』（1889-91）の編纂者として著名なばかりでなく、『廣日本文典』をはじめとする文法書を著した日本語研究者の顔をもつ。祖父は蘭学者大槻玄沢（磐水）、父は儒学者磐溪、兄は如電（修二）という学者一族の家系であり、開成所と大学南校で英学や数学を修めた。横浜へ出て英語を学びながら西洋新聞の翻訳などもしたが、1872（明治5）年に文部省に出仕して、英和対訳辞書や教科書の編輯に従事した。成島柳北が讒謗律で入獄したために、朝野新聞の社説を担当したこともあった。1875（明治8）年設立の学術結社「洋々

社」の会員として機関誌『洋々社談』に論文を活発に投稿したり、1883（明治16）年には「かなのとも」を組織して（のちに「かなのくわい」と改称）国字問題に取り組んだりしている。著作物には、『北海道風土記』『琉球新誌』『小笠原新誌』などの領土論や『日本小史』という歴史書もある。文彦の生涯は、東京日日新聞に連載された「大槻博士自伝」（1909/1928）や高田宏による伝記『言葉の海へ』（洋泉社、2007）などに詳しい。

本稿では、明治期の日本語と格闘した大槻文彦の翻訳テキストに焦点を合わせる。まずは彼が担当した「言語篇」「印刷術及石板術」を含む文部省の翻訳プロジェクト『百科全書』の全体像を素描したのちに、原著 *Chambers's Information for the People* の一編 *Language* とその翻訳「言語篇」のテキストを読み解き、大槻文彦の翻訳行為を近代日本の言語研究というコンテキストのなかで考察する。文彦が「言語篇」で訳出した歴史主義的言語観は、18世紀西洋での普遍主義（言語学においては普遍文法）から19世紀の国民国家を単位とする比較研究（比較言語学）へと転回していた。このような西洋近代の言語学を初めて日本に紹介した「言語篇」という翻訳テキストは、*language* との等価を虚構した近代日本語「言語」という翻訳語の創発の場であった。

2. 文部省『百科全書』と「言語篇」

2.1 『百科全書』とは

明治初年の文部省において出版活動は重要な事業のひとつであった。近代国家建設のためには、近代的知の枠組みを創出する必要がある。そのような時代のなかで文部省『百科全書』の翻訳は、同省編輯寮の箕作麟祥と編書課の西村茂樹を中心とした大規模な国家的プロジェクトとして始まった。

起点テキストとして選ばれたのは、19世紀ヴィクトリア朝時代の英国エディンバラで出版社を起業した兄ウィリアム・チェンバーズ（William Chambers: 1800-83）と弟ロバート・チェンバーズ（Robert Chambers: 1802-71）が編んだ *Chambers's Information for the People* である。チェンバーズ兄弟は良質の内容を低価格で民衆に提供する啓蒙書として、1833-35年に *Chambers's Information for the People* の初版を刊行した。当初は分冊形式だったが、再版以降は2巻本としても出版されるようになった。

文部省の事業としては、1873（明治6）年から *Chambers's Information for the People* の各編の木版和装分冊本による翻訳出版が一冊ずつ始まった。急速な西洋化の波が押し寄せるなかで途中から活版洋装分冊本へと変更されたが、和装分冊本も同時に翻刻されていた。さらに合冊本が民間書肆によって予約出版されるようになり、有隣堂の20巻合冊本や丸善の12巻合冊本・3巻合冊本（別冊「索引」を加えれば、各13巻・4巻）なども企画され、その新聞広告から当時の流通状況を窺うことができる。

この国家プロジェクトは、出版開始からおおよそ10年程度で一応の収束に向かったとみられる。最終的には原著92編のうち *English Grammar*（英文法）を除く91編の翻訳が完

成して出版された。全容は複雑であり見えにくい、分かる範囲で概要をまとめておく。

このプロジェクトの規模の大きさは特筆に値する。文部省『百科全書』のために当時の洋学者が総動員されたという表現は誇張ではなく、のべ100名の翻訳者・校訂者が関与しており、そのなかには若き日の菊池大麓、高橋是清、永井久一郎など錚々たる人物がいる。だが、翻訳の底本となった原著書の入手ルートも定かではなく、関連する資料や記録がほとんど残されていない。加えて、途中で原著新版を底本として別の翻訳者による改訳が実施されたり、編名が変更になったりしたものがある。今では、日本各地の民間書肆が翻刻した多様な装幀で出版された各種異本が不揃いに現存している。このような文部省『百科全書』の書誌を考証し、稿を改めて論じる必要がある。

ここでは文部省『百科全書』の内容全体をイメージするために、近年になって青史社が復刻した91編のタイトルを便宜的に挙げておく。これは、文部省分冊本(和装・洋装)、有隣堂合冊本を混合して、1983年から86年にかけて復刻したものである²。

天文学、気中現象学、地質学、地文学、植物生理学、植物綱目、動物及人身生理、動物綱目、物理学、重学、動静水学、光学及音学、電気及磁石、時学及時刻学、化学篇、陶磁工篇、織工篇、鋳物篇、金類及鍊金術、蒸気篇、土工術、陸運、水運、建築学、温室通風点光、給水浴澡堀渠篇、農学、菜園篇、花園、果園篇、養樹篇、馬、牛及採乳方、羊篇、豚兔食用鳥籠鳥篇、蜜蜂篇、犬及狩猟、釣魚篇、魚猟篇、養生篇、食物篇、食物製方、医学篇、衣服及服式、人種、言語、交際及政体、法律沿革事体、太古史、希臘史、羅馬史、中古史、英国史、英国制度国資、海陸軍制、歐羅巴地誌、英倫及威爾斯地誌、蘇格蘭地誌、愛倫地誌、亜細亜地誌、亜弗利加及大洋州地誌、北亜米利加地誌、南亜米利加地誌、人心論、骨相学、北欧鬼神誌、論理学、洋教宗派、回教及印度教仏教、歳時記、修身論、接物論、経済論、人口救窮及保険、百工儉約訓、国民統計学、教育論、算術及代数、戸内遊戯方、体操及戸外遊戯、古物学、修辭及華文、印刷術及石版術、彫刻及捉影術、自然神教及道德学、幾何学、聖書縁起及基督教、貿易及貨幣銀行、画学及彫像、百工応用化学、家事儉約訓

青史社復刻版では、分冊された全91編が3～6冊毎に23巻にまとめられて函入りにされている。復刻版「言語篇」の外表紙には「篇」がなく、単に「言語」とある。この「言語」は第12巻に入っており、同巻には高橋是清訳・久保吉人校「衣服及服式」、秋山恒太郎訳・内村耿之介校「人種」、高橋達郎訳・内村耿之介校「交際及政体」が共に収められている。なお、「言語篇」には校訂者の名前はない。

2.2 「言語篇」刊行事情

文部省『百科全書』の出版経緯は全体として複雑であるが、「言語篇」もその例外ではなく、刊行年に不明な点が残る。先に引用した時枝誠記『国語学史』を繰り返せば、「明

治 19 年大槻文彦博士は、チェンバースの百科辞書中の言語篇を翻訳された」とあり、『国語と国文学』第 5 巻第 7 号 (1928) の「大槻文彦博士年譜」でも、明治 19 年 9 月に「言語篇を訳述し刊行す」と記載されている。ただし、この 1886 (明治 19) 年は、文部省印行「言語篇」を有隣堂が翻刻出版した年であり、「言語篇」初版の刊行年ではないと思われる。有隣堂合冊本「文部省刊行 第十一冊」並びに「東京帝国大学附属図書館」印のある有隣堂分冊本の奥付によると、「明治 19 年 3 月 16 日翻刻出版御届」「翻刻出版人 東京書肆 穴山篤太郎」「発兌 有隣堂」「印刷 有隣堂活版所」が確認できる。

青史社復刻版「言語」の表紙では「明治十二年三月」としているが、その根拠は不明である。この 1879 (明治 12) 年説を踏襲したのが、松永俊男の *Chambers's Information for the People* 第 5 版復刻版の別冊解説 (ユリカ・プレス、2005) である。だが、この時期の刊行であるならば、1883 (明治 16) 年 8 月までに出版された『百科全書』を一覧にしている「文部省出版書目」に「言語篇」が含まれていないこと、1883 (明治 16) 年から 85 (明治 18) 年に出版された丸善の合冊本に「言語篇」が欠落している状況とも齟齬が生じる。

1909 (明治 42) 年の『東京日日新聞』に連載された文彦の「自伝」には、「萬国史略は師範学校の教科書で (8 年出版)、英文の翻訳もので羅馬史略十巻 (14 年出版)、印刷術及び石版術・言語篇 (14 年 16 年出版) は文部省の囑託である」と書かれている。実際には「印刷術及石版術」は 1880 (明治 13) 年 8 月または 9 月の刊行であり、本人の記憶が若干ずれている可能性も否めない。とはいえ、「言語篇」の初版が明治 16 年であれば、福鎌達夫の考証による「明治 16 年末頃から明治 17 年末まで」とする推定とも整合する (福鎌, 1968, p. 25)。

国立国会図書館、国立公文書館、全国各大学図書館などに「言語篇」初版の分冊本は所蔵されておらず、結局のところ初版の現物は確認できない。あるいは、初版分冊本は未刊行の幻であったかもしれない。いずれにせよ、明治 19 年に有隣堂が翻刻した「言語篇」が時枝誠記の目に留まったのである。

3. 文法をめぐる近代：『言海』と文部省『百科全書』

大槻文彦が西村茂樹から辞書編纂の官命を受けたのが 1875 (明治 8) 年、『言海』完成が 1891 (明治 24) 年である。文彦は「言語篇」(前述のとおり、文部省版は明治 12 年説、16 年説など諸説あり、有隣堂版は明治 19 年) の翻訳を『言海』の編纂と並行して行っていた。文部省『百科全書』全体としても、1873 (明治 6) 年 7 月に刊行された文部省版分冊本の「土工応用化学」から 1883 (明治 16) 年 8 月刊行の 88 冊目「農学」、1885 (明治 18) 年の丸善版別冊「索引」までの期間は、文彦がひとりで『言海』に取り組んだ 17 年間とほぼ重なる。両書は同時代の出版物である。

福澤諭吉は『言海』の出版を祝して、「言海以前日本に辞書なし」とまで言い切った。

従来の「節用字引の類」との差異を「日本開闢以来始めて辞書の体裁を備へたる」と称賛した（『福澤諭吉全集第19巻』）。もっとも福澤は、『言海』を贈呈した文彦に向かって、「寄席の下足箱が五十音でいけますか」と顔をしかめ、それに対して文彦が「小学でもハヤ二十年来五十音を教へて居ることに思ひ至られなかつたのもあらうか」と感想を漏らしたという逸話も残されている（大槻博士自伝）。『言海』の「本書編纂ノ大意」で文彦は西洋の「アルハベタ」に倣ったと述べているが、先の逸話は「いろは」から「五十音」への転換期を象徴したものと言える。

西村茂樹は「言海序」で「追逐西国辞書之第一歩」と記しているし、『言海』の国語辞書としての近代性は広く認められていた。『言海』の近代的辞書編纂方法としては、「発音 Pronunciation」「語別 Parts of speech」「語原 Derivation」「語釈 Definition」「出典 Reference」など、*Webster's Royal Octavo Dictionary* やヘボン『和英語林集成』という西洋的近代辞書を模範としているとされる。特に「語別 Parts of speech」という、現在の用語では「品詞」を見出し語に明記した点は、これまでの辞書にない『言海』の特色であった。日本語の品詞を確定するための西洋文法は、『言海』の近代性と切り離すことができない。

文部省『百科全書』の翻訳プロジェクトでは、原著の *English Grammar* 一編のみが最後まで翻訳されていないことは先に述べた。当時の日本には既存の「英文典」が多数あり、新刊の英文法書はもはや要請されていなかったのかもしれない。内表紙に「明治十一年十一月 第十八冊 百科全書 文部省印行」とある有隣堂合冊版「百科全書第十八冊目録」には「英吉利文法」という編名も含まれているが、「是ヲ邦語ニ訳スルトキハ其用ヲ為サズ故ニ今之ヲ省ク」と断り書きがある。翻訳されなかった理由が直接確認できるのは唯一これだけだが、翻訳が刊行されていなくとも、文彦が *English Grammar* を読んでいた可能性は否定できないだろう。大槻文法と『百科全書』の *English Grammar* 「英吉利文法」は、*Language* 「言語篇」を介し邂逅していたのかもしれない。

国語学・日本語学の研究史において、大槻文彦の文法体系は国学系と洋学系の「折衷文法」と位置付けられてきた。このような評価は、『言海』の巻頭に摘録された「語法指南」をはじめ、後の『廣日本文典』で展開された大槻文法に対するものだ。文彦自身も「ことばのうみのおくがき」のなかで、「数十部の語学書をあつめ、和洋を参照折中して、新にみづから文典を編み成して、終にその規定によりて語法を定めぬ」と述べている。

日本語における「文法」という語は元来、法令文や文章作法を指していた。1872（明治5）年の学制頒布で小学校に「文法科」が設置されたが、この文法という語を当時の人々はどうのように受け止めたのであろうか。文彦は1875（明治8）年、『洋々社談』第7号に「日本文法論」を発表して、「方今我国ノ文学ニ就キテ最大ノ欠点トスルハ日本文典ノ全備セル者ナキナリ。是ナキハ独我国文学ノ基礎立タザルノミナラズ外国ニ対スルモ真ニ外聞悪シキ事ナラズヤ」と述べている。つまり、外国に対して自国の「日本文典ノ

全備」が必要であると言うのだ。1897（明治30）年の『廣日本文典』では「言語に法則あるが故に、文章にも法則あり、其法則を文法といひ」と、法則としての文法に言及しているが、大槻文法が国家意識としての文法から出発した事実は確認しておいてよい。

4. Language と「言語篇」

4.1 概要

まず、Language と「言語篇」の内容を概観しておきたい。「言語篇」が底本とした第5版 *Chambers's Information for the People* (1874-75) における Language は、同書第2巻に収められており、No. 54 として1ユニット分の16頁 (pp. 17-32) が割かれている。

時枝誠記『国語学史』は「言語篇」の内容を簡潔にまとめて、総論として「言語の定義、言語研究の目的、比較沿革の二研究法」、各論として「声音の事、言語変化の理の事、方言の事、言語系統の事、分類の事、言語起源由来の事、言語と人種との事等の問題であつた」(p. 167) としている。実際の目録は次のとおりである。ちなみに起点テキスト Language には、Table of Contents に相当する体裁はない。16頁に及ぶ Language 本文中の章立てが、翻訳テキストにおいては「言語篇目録」として別立てでの記載となっている(引用訳文中の左ルビは、[] 内に半角文字で示す)。

総論

声音ヲ論ズ	THE HUMAN VOICE.
言語ノ変化スル所以ヲ論ズ	HOW LANGUAGE CHANGES.
言語ノ構成ヲ論ズ	WORD-BUILDING.
方言ヲ論ズ	DIALECTS.
国語ノ分科ヲ論ズ	FAMILIES OF LANGUAGES.
グリム氏ノ法則	GRIMM'S LAW.
セミテック語科	THE SEMITIC FAMILY.
言語ノ模像〔タイプ〕ヲ論ズ	TYPES OF LANGUAGE.
各種ノ言語ハ皆一個ノ本源ヨリ出デタリヤ	ARE ALL LANGUAGES SPRUNG FROM ONE?
言語及ビ人種ノ混淆ヲ論ズ	MIXTURES OF LANGUAGES AND RACES.
語根〔ルート〕ヲ論ズ	ROOTS.
言語ノ由来ヲ論ズ	ORIGIN OF LANGUAGE.

この目録では、language が「言語」、word が「言語」、languages が「国語」「言語」と訳されている。また、本文中には、speech を「言語」と訳出している箇所もある。つまりは「language = 言語」という等価は、「言語篇」においてまだ成立半ばというところか。もともと、私たちが「language = 言語」を等価と思い込んでいることも虚構にすぎない

のだが。

4.2 「言語」とは

「言語篇」の「総論」に該当する原文の冒頭部分には特に名称はなく、「総論」という章名は翻訳に際して追加されたものである。この「総論」における第1段落とそれに該当する原文は次のように始まる。

LANGUAGE in its widest sense signifies any means by which one conscious being conveys what it thinks or feels to another. Thus we speak of the language of the eyes, the language of birds. But in ordinary usage we understand by language the system of sounds uttered by the human voice in the intercourse of society – articulate speech. The writing of language does not alter its character in this respect; it only introduces an intermediate set of signs or marks. The written characters do not convey the meaning directly, they only indicate certain sounds; and it is these sounds that are still the immediate vehicle of the thoughts. It is language in this sense – the communication of our thoughts by means of spoken signs – that is the subject of the present paper.

言語〔ランゲージ〕トイフモノハ之ヲ概論スレバ知覚アル一生物ノ其思考シ或ハ感覺スル所ノモノヲ他ニ伝致スル方法ノ泛称トス譬ヘバ吾人常ニ眼ノ言語^{目ニテ相視テ意ヲ通ズルナリ}或ハ鳥ノ言語ト言フガ如シ然レトモ通常ノ意義ニテハ言語トハ人類ノ交際上ニ於テ人声ニテ談話スル所ノ諸音ノ集合セル者ヲ謂フナリ又言語ヲ書ニ筆スル時ニ至リテハ其性質随テ変ズベシヤト問ハンニ決シテ然ラズ此際ニ於テハ中間ニアリテコレヲ媒介スル記号ノ列序ヲ加フト雖ドモ然レドモ言語ノ意味ヲ伝通スル者ハ其記号ニアラズシテ尚其音ニ在ルナリ今茲ニ言語トイフ意義ハ此意義即チ説話ノ記号ニ由リテ吾人ノ思想ヲ他ニ通ズルノ謂ヒニシテ此篇中説ク所ハ即チ此旨趣ナリ

本編全体の内容が要領よく提示された段落である。「言語篇」のテーマは、「説話ノ記号ニ由リテ吾人ノ思想ヲ他ニ通ズル」(the communication of our thoughts by means of spoken signs) という音声中心主義的な「言語」(language) について論じることである。

冒頭の「言語」は language の訳語であり、「ランゲージ」と左ルビで音訳も併記している。この「言語」という語は古く漢籍にもあるが、わが国では江戸時代までは漢音の「ゲンギョ」と呉音の「ゴンゴ」があり、明治に入って両語形が混交して「ゲンゴ」になったという(『日本国語大辞典 第二版』)。

「言語篇」初版が刊行されたと推測される 1883 (明治 16) 年当時、「言語」はどのような音声だったのだろうか。確実に言えるのは、「ランゲージ」というシニフィアンが language と「言語」を媒介しているということだけである。現代の私たちは「language =

言語」を自明のものとして思考しがちである。だが、はじめに「language = 言語」があったのではなく、翻訳行為によって「language = 言語」が成立したと言える。「ゲンギョ」「ゴンゴ」と「ゲンゴ」は必ずしも同じシニフィエを共有しない。「ゲンゴ」には「ランゲージ」に媒介された language のシニフィエが混在するからである。

1873 (明治 6) 年に刊行された柴田昌吉・子安峻編『英和字彙』では、訳語にルビを振っている。右ルビを ()、左ルビを [] 内に示すと、Language には「語 (ゴ)、言葉 (コバ)、話 (ハシ)、国語 (コゴ)、話法 (カ)、民 (タミ)」、Speech には「説話 (ハシ)、言語 (ゲンゴ)、国語 (ケコバ)、言葉 (コハ)、公 (コ) 言、演述 (ハダテ) [ハ]、口演 (コジヤ)、Word には「詞 (コバ)、字 (ジ)、言語 (ゲンゴ)、句 (ク)、話 (ハシ)、論 (ロ)、演舌 (エンゼツ)、約束 (ヤクカ)、暗号 (アビツ)、指揮 (サツ)、命令 (メイイ)、報知 (シセ)、俗諺 (コワザ)」とある。speech や word の訳語としてではあるが、「言語」に「ゲンゴ」というルビが付されている早期の例が確認できる。ここですでに「ゲンゴ」という音声辞書がなかに獲得されているのだが、それが当時どの程度広く使用されていたのかについての判断には慎重でありたい。他の辞書も見ておこう。

ヘボンの『和英語林集成』で LANGUAGE を調べると、1867 (慶応 3) 年の初版では「Kotoba, monoi」、1872 (明治 5) 年の再版では「Kotoba, monoi, go」、1886 (明治 19) 年の三版は再版と同様であり、いずれも「言語」を入れていない。同辞書の和英の部には、初版では「言語」に相当する立項はないが、再版では GEN-GIYO の項に「ケンギョ、言語、n. Same as Gon-go」とあり、三版では「GEN-GYO, or GENGO ゲンギョ 言語 n. Same as gongo」となって「ゲンゴ」という読みが登場する。再版の GON-GO と三版の GONGO には、「ゴンゴ 言語 n. Words; speech; language」とある。つまり、1872 (明治 5) 年までに language と結びついた「言語」が、1886 (明治 19) 年には「ゲンゴ」という音声でも使用されるようになっていたことが想像される。なお、同辞書における SPEECH については、初版で「Kotoba; monoi; hanashi」、再版と三版で「Kotoba, mono-ii, hanashi」であり、「言語」は登場しない。また WORD については、初版から三版まで全てに「ゴンゴ」としての「言語」が出現する。ちなみに、1869 (明治 2) 年のスウィリアムズ『英華字彙』の Language には「話、言語」とあるが、1884 (明治 17) 年の羅布存徳 (ロブシャイト) 原著・井上哲次郎訂増『増訂英華字典』での訳語は「話、語」のみである。このように、language の訳語としての「言語」、さらにその音声についてのゆらぎが明治前半の辞書で確認できる。

1891 (明治 24) 年に完成した『言海』の記述によれば、「げんご (名) 言語 げんぎよニ同ジ」「げんぎよ (名) 言語 コトバ。モノイヒ。」と説明されている。こうして文彦の辞書は、「ゲンギョ = ゲンゴ」を定めたのである。さらに、「ことば (名) 言葉 (葉ハ繁キ意ト云) (一) 人の思想 (根比) ヲロニ言出スモノ。人ノ声ノ意味アルモノ。言 (コ)。言ノ葉。モノイヒ。ハナシ。詞 辞 言語 (二) 言葉ノ、ヒトツヒトツナルモノ。ヒトコ

ト。…」とある。しかしながら、「ゲンギョ」が「言葉」を意味するものであるのならば、「言葉 = 言語 (ゲンギョ)」と「language = 言語 (ゲンゴ)」とは、完全に重ならないことは明らかであろう。

ところで、1886 (明治 19) 年に帝国大学文科大学に設立された「博言学科」が、その後「言語学科」と改称されるのは 1900 (明治 33) 年である。1898 (明治 31) 年には「言語学会」が創設、その 2 年後の 1900 (明治 33) 年に機関誌『言語学雑誌』が創刊される。この時期には、「言語」は「ゲンゴ」という近代語の音声で定着していただろう。翻訳語としての「ゲンゴ」の普及によって「ゲンギョ」の記憶は次第に忘却され、「ゴンゴ」は「言語道断」など特定の読みに限定されるようになった。

大槻文彦は「言語篇」を「言語 [ランゲージ] トイフモノハ」という「主語」で訳し始めた。この「トイフモノ」と左ルビの「ランゲージ」という余剰には、language を「言語」とする翻訳語それ自体への特別な扱いが表出している。つまり「言語ハ」と無防備に主題化することへの翻訳者のためらいがあるのだ。ここでの「言語」は、前近代の「ゲンギョ」「ゴンゴ」とは切断され、language の訳語としての近代日本語を創出した「ランゲージ」というもの」なのであった。

4.3 Universal Grammar

「言語篇」が底本とした第 5 版の Language は、文部省『百科全書』91 編の大多数が底本としている無年記版 NEW EDITION の Language に変更が加えられている。世界の主な言語を比較しながら、進化論的に考察していくという 19 世紀的な比較言語学の手法は無年記版と第 5 版に共通するが、無年記版の UNIVERSAL GRAMMAR (普遍文法) という章立てが第 5 版には欠けている。このために、「言語篇」を「西洋言語学」紹介の嚆矢と評価した時枝も見落としたのかもしれないが、第 5 版においても universal grammar が登場する箇所がある点にはもっと注目しておいてよい。

universal grammar を大槻は「普通文法」と訳しているが、現在では「普遍文法」という訳語のほうが定着している。ただし、20 世紀半ば以降の現代言語学において「普通文法」という用語は、アメリカの言語学者チョムスキー (Noam Chomsky) の生成文法理論における概念 (UG と略されることも多い) を指す場合が一般的となった。これは、人の言語獲得という根源的な問いから導き出された概念である。ただし、普遍文法あるいは一般文法という考え方そのものは、西洋言語学では 17 世紀のポール・ロワイヤル文法以来の伝統として受け継がれてきたものである。

「言語篇」では、「普通文法」という訳語に「ユニブルサル、グラマ」と左ルビが付いている。言語研究の目的とは、まずある言語を理解したり、話したり、書いたりできるようにすることであり、もうひとつが複数の言語を比較考究することによって universal grammar を導き出すことなのだ」と述べた部分である。

It is the general facts thus arrived at by induction that form what are called the general principles or laws of language – universal grammar – as distinguished from the peculiarities of individual languages.

蓋シ斯ク比較考究シテ得タル所ノ通用ノ事実ハ之ヲ各個国語ノ固有性ニ區別シテ以テ言語ノ通則即チ語法（普通文法 [ユニバーサル・グラマ]）ト名ヅクル者ナリ

universal grammar は the peculiarities of individual languages から区別される。ここで重要なのは、「各個国語ノ固有性」が「普通文法」と区別して虚構されてしまった点にある。日本語への翻訳行為によって、individual languages（個別言語）にすぎないものが「各個国語」となったのだ。文彦自身、その「国語」という虚構の「固有性」と格闘する只中であつた。

西洋の伝統的な universal grammar という概念を、おそらく日本に初めて紹介したのは「言語篇」であつた。しかし文彦はその後、この概念を発展させることはなかつた。明治大正期の日本語研究で普遍文法的な言語観を主張したのは文彦ではなく、「語理学」「一般理論文法学」などにおける松下大三郎（1878-1935）である（斉木・鷺尾, 2012, p. 35）。松下と「言語篇」との直接的な関係は不明だが、松下の文法論が当時主流とはならなかつたのは確かである。それは、ドイツ留学を契機として 19 世紀最先端の言語研究を学んだ上田万年の言語観とは相容れないものであつたからだ。上田は帰朝後の 1894(明治 27) 年から東京帝国大学で博言学講座を担当し、ドイツで学んだ比較言語学を「科学的」言語研究の中心に据えた（上田万年講述『言語学』を参照）。

「言語篇」で紹介された universal grammar という概念は、当時の日本語研究者ばかりでなく、大槻文彦本人からも無視された。斉木・鷺尾（2012）も指摘するように、上田万年やその一門にとっては、「18 世紀的な普遍文法論や松下の一般理論文法学に注目する理由がなかつた」（p. 36）という時代状況が大きく影響している。「言語篇」の中心は比較言語学であるが、西洋の言語研究には universal grammar が伏流水のように存在している。明治期日本の言語研究は、いわば表流水のみを西洋から受け入れたのである。

4.4 比較言語学という進化論

ダーウィニズムの進化論が席卷した時代、西洋における言語学にもその波が押し寄せていた。山室信一は法学という観点から、当時の学問方法を普遍主義から歴史主義への転回として総括するが、これは言語学の潮流とも重なる。

「啓蒙の世紀」18 世紀から「歴史の世紀」19 世紀への推移、それはまさしく普遍主義から個別主義への転換であり、歴史的個性への着目であり、それを前提とした比

較の成立であった。その意味で生物進化論もまさに歴史主義の所産であり、歴史法学も比較法学も同時代の子であった。

(山室, 1988, p. 496)

ここでは法学を言語学と読み替えるだけでよい。学問分野が国民国家を単位として成立するなかで、歴史主義的な比較言語学もきわめて 19 世紀的な学問であったのだ。

1875 年に出版された *Chambers's Information for the People* の第 5 版における Language の内容は、比較言語学の祖とされるジョーンズ卿 (Sir William Jones: 1746-94) や比較文法を確立したボップ (Franz Bopp: 1791-1867) の言語研究、ゲルマン語の子音変化についての「グリムの法則」(Grimm's Law)、オノマトペに関するマックス・ミュラー (Friedrich Max Müller: 1823-1900) などへの言及を含み、比較研究に基づいて言語を進化論的に論じたものであった。「言語篇」によって明治初期の日本に紹介された「西洋言語学」の中心には、各言語を歴史的な語族に分類する言語理論が君臨していた。

比較言語学という研究手法は、18 世紀末にジョーンズ卿がカルカッタにあるアジア協会で行った講演に端を発する。植民地インドで判事をしていたジョーン卿は、サンスクリット語とギリシャ語・ラテン語との類似点を指摘したのだった。この点を述べたジョーンズ卿を引用した Language と「言語篇」の該当部分は以下のとおりである。

Sir William Jones declared that 'no philologist could examine the Sanscrit, Greek, and Latin without believing them to have sprung from the same source, which perhaps no longer exists. There is a similar reason, though not quite so forcible, for supposing that both the Gothic and the Celtic had the same origin with the Sanscrit. The old Persian may be added to the same family.'

サー・ウィルリヤム・ジョーンズ氏嘗テ謂テ曰ク「語学者若シ希臘語羅匈語及ビ梵語ヲ探究セバ其現今全ク生存セザル所ノ一種ノ言語ヨリ発生シタルコトヲ信ズベシ且セルテック語及ヒゴヂック語ノ如キハ希臘語及ヒ羅匈語ノ如ク類似ノ痕斯克判然タラズト雖トモ亦梵語ト其起源ヲ同ジウスル者タルコトヲ信ズベキ理アリ又波斯〔ペルシア〕ノ古語モ梵語ト同族ナリ」ト

こうして 19 世紀の言語研究では、個別言語を比較しながら歴史的に辿るのである。さらに言語分類の原理を説明し、世界の主要言語を具体的に Isolating「孤立語」、Agglutinate「粘着語」(膠着語)、Inflectional「変尾語」(屈折語)に分類する。

I. Monosyllabic or isolating. – 1. Chinese, the typical language of this order. 2. Tibetan, which shews some beginnings of grammatical forms. 3. The languages of the Eastern

Peninsula – Siamese, Anamese, Burman. Japanese and the language of Corea are doubtful.

第一、単綴語一名孤立語 〔一〕支那語、此語ハ此種類ノ模範タル者ナリ 〔二〕西蔵語、此語ハ稍々文法変化ノ端緒ヲ開ケリ 〔三〕東方半島〔イヌフル、ペニシユラ〕ノ言語、即チ暹羅語、安南語、緬甸語、日本及ビ朝鮮ノ言語ハ此種ニ属スルヤ否ヤ疑ヲ容ルベキ所アリ

この類型論では中国語、チベット語、シャム語、アンナン（安南）語、ビルマ語などは孤立語であり、日本語と朝鮮語は孤立語としての可能性も示唆されている。そして、続いて Agglutinate 「粘着語」（膠着語）と Inflectional 「変尾語」（屈折語）が説明され、最後はこう結ばれる（ここでの these languages とは、Inflectional languages を指す）。

It is the peoples speaking these languages that have been the leaders of civilization within the historic period.

人類記録ノ開ケシ以来世ノ文明ヲ先導セシモノハ則此語ヲ談ズル人民ナリ

近代化を欲望する日本という国家にとって、その国語としての日本語もまた文明開化せねばならない対象となる。「言語篇」には、このような 19 世紀の西洋言語学の概要がコンパクトにまとめられていた。

ところが 20 世紀初頭、スイスの言語学者ソシュール (Ferdinand de Saussure) の言語理論によって、19 世紀言語研究のパラダイムであった比較言語学は過去の遺物となった。周知のように、ソシュールの言語理論は彼の没後の 1916 年に *Cours de linguistique générale* としてまとめられ、その第 2 版 (1922) を底本とした小林英夫訳の初版『言語学原論』（のちに『一般言語学講義』と改訂）は、世界に先駆けた外国語訳として 1928 年に出版されている。このパラダイム・シフトにより、ソシュール以前の比較言語学の記述を主とした「言語篇」は、わが国の言語研究史のなかで忘却された。

5. おわりに

本稿では、明治初期の国家的翻訳プロジェクトである文部省『百科全書』における大槻文彦訳述「言語篇」に焦点を当て、この翻訳書が時代状況とどのように切り結んできたか考察を深めた。

19 世紀の欧米列強のナショナリズムは、各国の「国語」辞書という文化装置としても現象した。例えば、ドイツではグリム兄弟が始めた『ドイツ語大辞典』 (*Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm*、立案 1838、刊行 1854-1961)、フランスではリトレの『フランス語辞典』 (*Dictionnaire de la langue française*、1863-73)、アメリカではウェブスターの『アメリカ英語辞典』 (*An American Dictionary of English Language*、

初版 1828)、イギリスでは『オックスフォード英語辞典』(*Oxford English Dictionary* = OED、立案 1857、初版 1884-1928) という具合に。明治期の日本も近代国家となるために、近代的編纂方法による語彙と文法体系を渴望した⁴。1875 (明治 8) 年、大槻文彦が文部省からの官命を受けて編纂を開始した『言海』は、「17 年の辛勤」(西村茂樹祝辞) を経て結晶した日本初の近代国語辞書とされる。『言海』という近代は、その陰に隠れた「言語篇」という近代とも接合される。

『言海』の編纂作業とほぼ同時期に展開していたのが、文部省『百科全書』の翻訳プロジェクトである。その一編として文彦が翻訳した「言語篇」は、言語研究への根源的な問題を突きつける。「language = 言語 (ゲンゴ)」を自明の等価とする思考を拒絶するのである。

国学の伝統とは切り離された明治期の「国語」研究は、時枝誠記『国語学史』が正しく総括したように、「国字国語問題に狂奔する」一方で、「西洋学術の水準にまで我が国の学問を高めて行く」(p. 167) ことに傾注した。まさにその奔流のなかで大槻文彦は、*universal grammar* という概念や西洋の比較言語学を逸早く日本語で紹介するとともに、日本という国家を意識した領土論を著し、「かなのとも」を組織し、近代国家のための文法と辞書を創出した。もともと、*universal grammar* は当時主流の言語研究における「反普遍文法」の流れから零れ落ち、また上田万年に先行した進化論的な比較言語学はソシユール言語学の登場で顧みられなくなった。

日本の言語研究のなかでは忘れられてきた「言語篇」を、本稿では近代日本における翻訳テキストとして読み解くことを試みた。近代国語辞書としての『言海』と格闘しながら文彦がその一編の翻訳に取り組んだ *Chambers's Information for the People* には、西洋近代が凝縮されている。文部省『百科全書』という翻訳テキストは、現代の私たちに何を伝えているのか。「言語篇」の読解を振り返り、再度強調しておきたいことは、「language = 言語 [ランゲージ] というもの」のためらいがちな初発の予感である。「language = 言語」という等価が存在していたのではなく、翻訳行為によって等価という幻想が遂行され既成事実化される。このような翻訳の出来事のひとつが大槻文彦訳述「言語篇」という近代であり、翻訳行為の痕跡が刻印されたテキストなのである。

註

1. 時枝誠記『現代の国語学』(有精堂出版、1956) においても、「言語学が日本に輸入されたのは、上田万年の留学以前からのこと」(p. 6) として「言語篇」の先行性が紹介されている。また「言語篇」を論じた最近の研究に、齊木美知世・鷲尾龍一『日本文法の系譜学』(開拓社、2012) がある。管見の限り、これは「言語篇」の内容にまで踏み込んだ唯一とも言える先行研究だが、翻訳研究ではない。
2. 青史社に直接確認したところ、青史社復刻版は基本的には国立国会図書館所蔵本を底本とし

ているということであった。しかし、同図書館には明治12年刊行の「言語篇」は見当たらない。後述の松永が青史社版に依拠している事実は私信による。

3. 無年記版 Language の本文中の章立てを転記すると、「THE HUMAN VOICE – FORMATION OF LETTERS AND WORDS / UNIVERSAL GRAMMAR / ORIGIN AND PROGRESS OF LANGUAGE IN GENERAL / THE LANGUAGES OF THE GLOBE (Indo-European Languages/Tartar, Tatar, or Turanian Languages/Semitic Languages/ African Languages/The Malay Languages/Chinese Language/American Languages)」である。UNIVERSAL GRAMMAR の章立てが明示的であり、これであれば当時の言語学者の注意をもっと喚起したであろう。
4. 西洋におけるナショナリズムと辞書については本田 (2005)、日本における辞書の政治性については安田 (2006)、『言海』の編纂とその近代性については犬飼 (1999) を参照されたい。

参考文献

- 犬飼守薫 (1999). 『近代国語辞書編纂史の基礎的研究』 風間書房.
- 上田万年講述・新村出筆録・柴田武校訂 (1975). 『言語学』 教育出版.
- 大槻文彦 (1875/2002). 「日本文法論」 鈴木広光校注『復軒雜纂 1』 平凡社.
- 大槻文彦訳述 (1886). 「言語篇」『百科全書 第十一冊』 有隣堂.
- 大槻文彦 (1889/2004). 『言海』 筑摩書房.
- 大槻文彦 (1909/1928). 「大槻博士自伝」『国語と国文学』 第5巻第7号, 38-52 頁.
- 筧五百里 (1928). 「大槻文彦博士年譜」『国語と国文学』 第5巻第7号, 23-38 頁.
- 慶応義塾編 (1962). 『福澤諭吉全集 第19巻』 岩波書店.
- 斉木美知世・鷲尾龍一 (2012). 『日本文法の系譜学』 開拓社.
- 高田宏 (2007). 『言葉の海へ』 洋泉社.
- 時枝誠記 (1940). 『国語学史』 岩波書店.
- 時枝誠記 (1956). 『現代の国語学』 有精堂出版.
- 福鎌達夫 (1968). 『明治初期百科全書の研究』 風間書房.
- 本田毅彦 (2005). 『大英帝国の大事典作り』 講談社.
- 松永俊男 (2005). 「チェンバーズ『インフォメーション』と文部省『百科全書』について」『Chambers's Information for the People 〔復刻版〕別冊日本語解説』 ユーリカ・プレス.
- 安田敏朗 (2006). 『辞書の政治学——ことばの規範とはなにか』 平凡社.
- 山室信一 (1988). 「日本学問の持続と転回」 松本三之介・山室信一校注『学問と知識人』 岩波書店.
- Chambers, W. & R. (Eds.) (18--). *Chambers's Information for the People, New and improved edition*. London and Edinburgh: W. & R. Chambers.
- Chambers, W. & R. (Eds.) (1874-75). *Chambers's Information for the People, 5th edition*. London and Edinburgh: W. & R. Chambers.